

編集後記

以前もご紹介させていただきましたが、梅雨入り前後のこの時期、南さつま市の金峰町にホタルを観に行くことを恒例にしています。今年は行動制限が解除されたせいか平日にもかかわらずかなりの人出で、あちこちで子供達の嬌声がかしましく、ゆっくり鑑賞出来ない状況でしたが、気持ちを落ち着けて集中していると周りの喧騒が気にならなくなり、いつも通りに楽しむ事ができました。幽玄としかいいようのないホタルの光、何度観てもいいものです。

今月の「誌上ギャラリー」は大山先生よりお寄せいただいた“梅雨の棚田”。

霧雨にけむる整然とした棚田の緑と手前のアジサイの花の青が鮮やかで、じめじめした梅雨の不快感を忘れさせてくれる一枚です。

「論説と話題」では鹿児島赤十字病院の川上先生から“新型コロナウィルス感染症に係る感染症法上の位置付けの変更について”と題して、今後の医療提供体制に関連した内容について診療報酬上の取り扱いを含めて解説していただきました。

「挨拶」では今年4月から鹿大の教授に就任された侵襲制御学の松永明先生と呼吸器外科学の上田和弘先生からご挨拶いただきました。今後の活躍を期待しております。

「医療トピックス」では山口先生から、糖尿病以外にCKDや慢性心不全の治療薬として、ここ数年で適応拡大されたSCLT2阻害薬について解説していただきました。

「学術」では鹿児島市医師会病院脳神経内科の足立先生から“発熱と意識障害で発症したレジオネラ症の一例”と題して、髄膜炎様の症状が前面に出たレジオネラ肺炎の症例を紹介していただきました。レジオネラ症は肺病変以外にも約半分近くに神経症状が合併するとのことで大変参考になりました。また、3/20に行われた内科医会3月例会で医療法人社団誠和会牟田病院院長の柳瀬敏彦先生から“日常診療にお

けるピットフォールとしての甲状腺疾患”的演題でご講演いただいた内容を掲載しております。スクリーニングのポイントやガイドラインに沿った診断・治療の流れから、診断困難例や難治例など問題のある症例への対処法まで詳細に且つわかりやすく解説していただき、大変有益な内容となっています。是非ご一読ください。

「随筆・その他」では古庄先生から“赤十字切手⑤”と題して4点のフランスの切手を供覧していただきました。

リレー随筆は鹿児島大学病院の高附先生よりお寄せいただいた“ゾンビ映画の魅力”。このジャンルはファンからは神と称される、故ジョージ・A・ロメロ監督の作品が基本となり、その後の映画やゲーム等で瞬く間にホラー系ジャンルの勢力図を塗り替え、ディープなマニアも多く、実は私もその一人です。内容も感じ入る点が多く、機会があればゆっくり語り合いたいものです。

「鹿市医郷壇」6号の題吟は「“叱っ(がっ)”」でした。なるほどと思わせる作品ばかりで、いつも楽しく拝見しております。会員の先生方も是非挑戦してみて下さい。

私の住んでいる中央駅界隈ではここ最近、昼夜問わず大変な人出で、すっかり以前の賑わいを取り戻したようです。隣接する加治屋町も明治維新の史跡が多いせいか観光客の往来がひっきりなしで、特にアメリカ・ヨーロッパの旅行客が多くなり、世界的にコロナ禍が収束してきていることを実感します。思えば今回の災厄は医療関係をはじめ、経済面でも様々な問題点が浮き彫りになり、その対応など学ぶべき事が多かった気がします。落ち着いたとはいえ同様の事態はいつでも起きる可能性があり、今回の教訓をすぐに生かせるように準備を怠らないようにしたいものです。

(編集委員 寺口博幸)